

ふるさとこの歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと 風

第三十八号 (二〇〇九年七月)

風に吹かれて (09 7) 白井啓治

『真赤な紫陽花に心奪われて恋の降る里』

深紅の、いや芳醇な赤ワインの深みを持ったピロドのような赤い紫陽花のある事を初めて知った。霧雨の中に咲くそれを見た時の衝撃は、この紫陽花は恋の降る里にしか咲かない紅の色だと思ってしまった。

それは、覚悟をつくって一直線に傾斜してくる女性と出会った時に感じた衝撃と同じものであった。それで直ぐにこの深紅の紫陽花は恋の降る里に咲く花に違いないと思ったのである。そのとき若し側に女性がいたら、衝撃で見境なくなり、激しい恋に落ちたかもしれない。

さて、前号から詩を少し紹介していこうと思っ  
ているが、今回は、ことは座の朗読舞の脚本に書  
いたものから寒蝉(かんせん)を紹介したいと思  
う。寒蝉とは、季節外れの秋も深まってきた時期  
に啼く蝉の事であるが、一生懸命に雌を求めて啼  
いてもすでに雌は居ないという寂しい雄蝉の事だ  
である。この詩は単に恋人の振りむいてくれない悲  
しさを歌ったものだけではなく、逼塞するふるさ  
とに対する警鐘になればと言つ思ひも込めて詠ん  
だものである。

この詩は、今年の二月公演の「里子・大地の舞」  
に挿入した舞歌でもある。

“寒蝉(かんせん)”

この里山にはもうあなたはいないのですか  
私の言葉があなたの心に届いて

あなたが私の言葉に  
あなたの言葉を木霊に返してくださるまで

私はあと幾度声に啼けばいいのですか  
もし、私の声に啼く数の知れたら

私はこんなに苦しみことはありません  
私はもうじゅうぶん過ぎるほどあなた

に私の声を啼いています

でも未だじゅうぶんではないのですね  
私の啼く言葉の力が未だ足りないのですね  
それとも、

この里山にはもうあなたはいないのですか  
もうすぐ、もうまもなく私の声は涙と

もに枯れてしまおうでしょう  
あなたの谷水を汲むこともなく

寒蝉はあなたの恋をもとめて  
啼くことだけが定めなのですね

この里山にはもうあなたはいないのですか  
私はこのまま恋を求めて

言葉に啼いて終わるのですね

今夜、秋風が吹いたら

あなたの谷水を汲むこともなく死暮れて  
そして枯葉に腐して土に溶けて

わたしは無くなってしまつたのですね  
寒蝉はあなたがもういないと自覚しても

死ぬまで啼きつづけて終えるのです

田んぼ

ふたば自給農園 松山有里

6月7日の久しぶりによく晴れた日曜日、とう  
とうわたしたちの田んぼに苗が植えられた。その  
日お手伝いいただいたのは7名。前日からわたし  
は大興奮で朝早くから目がさめてしまつ始末。田  
んぼの仕事はどうしてこんな気持ちに人をさせる  
のだろう。米はわたしたちの主食であるからなの  
か、野菜作りとはまったく違う次元の世界にわた  
しをいざなう。

数年前に先生のとこでみせてもらった方法で、  
種もみの塩水選、熱消毒、芽出し…と進んで、あ  
たふたと芽の出すぎた種籾を田んぼの苗代に播く。  
苗代もたつた一日で作つてしまった。代かき、短  
冊作り、種まき、ビニールかけ(保温折衷苗代)、  
すべての工程が終わるころ、あたりはすっかり暗  
くなり、田んぼはもうカエルの時間に入っていた。  
それからまた苗が大きくなるまでがまた心配。

芽が出るか、肥料は足りるのか、水は多すぎない  
か、苗が大きくなつてくると今度は、田植えの日  
まで苗が黄色くならないか、天候は、と続く。

はじめての米作り、やり始めたらわからないこ  
とだらけである。失敗しながら、人に聞きながら

それこそ、田んぼのなかを歩くようなゆっくりした速度でしかことが進まない。以前先生が「田んぼは命がけだぞ」と言っていたと人に聞いたが、まさに田植えをするまでの仕事は男の仕事だと思った。ひとたび機械が田んぼの泥に捕まえられたらとても人の力では引つ張り出せない。田んぼを貸していただいているMさんには何度トラクターでひっぱってもらったことが。

わたしたちのやり方は昭和30年代に行われていた方法だ。田んぼをやっていると昔のやり方を知っているおじさんがいろいろ教えてくれる。まだまだそういう人が身近にいるのはありがたいことだ。田んぼでの黒塗り（畦が崩壊しないように毎年泥を畦に強く塗りつける作業。昔の人はこれを何キロも行ったそうだ。何百年も誰かが毎年それをおこなってきたので、今の田んぼの形状が保たれている。）もそのおじさんはあたりまえにやっていた。今ではその黒塗りもトラクターにあるパーツを取り付ければ一気にやってしまう。ただ年に一度しか使わないそのパーツはかなり高額なものと聞いた。今の日本はなぜか米を自分でつくと（普通に農薬や肥料を使って一般の販路で売ると）赤字になる。主食なのに、それを食べないと生きていけないのに、赤字になるとはいつたいたどこかどうなっているのか？私の隣のおばさんは、顔中ブヨに刺されてパンパンに腫れた顔で、毎朝4時に起きて田まわりだ。外に働きに行っている息子は「そんなのやめちまえ」と言う。でもおばさんは先祖代々の田んぼを荒らすわけにはいかないのだ。女ひとり田んぼを守っている。田植えも昔は人力でこのすべての田を植えていたのだから、一大事であったことと思う。

女は朝まだ暗いうちから苗取りをして（苗取りの前にお茶も摘んでいたときいた。）夕方遅くなるまで一日中苗を植える。私たちの田んぼなどほんのお遊びだ。

人が農村から姿を消し、都市に吸収されていく過程で仕方なく、人手の足りない部分を補うために使い始めたかもしれない除草剤や農薬。わたしは無農薬、有機質肥料を使って作物を作っている。

一方で除草剤を使ったり、農薬を使ったりしている農家さんもいる。ただここに住みはじめてから思うことは、一体だれがそれを非難できるのだろうかということだ。遠くにいてただ傷のなく、虫の食べていない果物がほしい、体に安全が食べ物がほしいと言う人々は、生産する側の健康については無視しているような気がする。先祖が残した大事な土地を守るため、たまの休みには草刈り草刈り。兼業農家には全く休みがない。専業農家だって休みはない。それは昔農村を潤していた「人」がいなくなってしまうからだ。人とともに働く楽しい時間も奪い取られてしまった。一人孤独に草刈り機をまわさなければいけない。昔の手仕事は私が想像するより遥かに大変なことだったと思う。

でもそれに匹敵するくらいの豊かな時間も流れていたはずだ。人と一緒に働く。それは素晴らしいこと。一緒に汗を流す。それは貴重なこと。一緒に汗を流したあとにみんなで食べるごはん。ちゃんとその労苦をねぎらう場も設けられていたのだ。（とはいっても昔の人の寿命が短かったのは労働がきつかったせいもあると思うので安易に昔はよかったですもいえない。）

慣行農業vs有機農業で二極対立するよりも、

農村にたくさんの人が働く環境をどうつくるかが大切な気がする今日このころである。農村の昼間は閑散としておじおばだけが田んぼを守るのではなく、若い人がエネルギーシユにバリバリ田んぼや畑で働いている、そんな環境はどうだろうか。考えただけでなんだかワクワクしてくる。そうすれば除草剤をまかないで、草刈り機で草をかることができる。何か方策がありそうな気がする。

田んぼからこんな話になってしまった。後日談、みなさんの田植えのあと苗代を片付け、田んぼの中で私は縄文踊りを奉納した。田の神様は水口に挿してある。両手を合わせ、深々と頭を下げた。田植えは命を田に吹き込む作業だ。苗を一本一本田にさしながら、わたしは命の艶めかしさを感じていた。この美しくなく、つかみどころのない、でもとてつもなく気持のいい田の泥のなかで、命<sup>2</sup>というものの具体的な形や感触を感じたような気がした

「田植え」初体験

小林幸枝

6月7日の事。ふたば自給農園の松山さんの所で、田植えを初めて体験しました。天候が心配されていたのですが、まさに五月晴れ（梅雨の晴れ間）で、気温も真夏並み。しかし、風が爽やかだったので、今年一番、今年最初の夏日だったにもかかわらず、大変快い一日になりました。そのかわり強い日差しに打たれ、私の白い柔肌は台無し<sup>1</sup>の真っ黒に。

松山さんのご主人から、田植え作業について丁

寧なレクチャーを受け、先ずは苗取りの作業が始まり、初めて田んぼに入ったのは良いけれど、二歩を進めるのが大変。泥から足が抜けません。私の体重が重すぎるからではありません。田んぼの泥はきめの細かいカスタードクリームのように、しかも吸いつくように長靴に吸着し、泥の中にどんどん引き摺り込んで行って、決して離そうとしないのです。どうにも身動きが取れなくなってしまうたら、いしおか補聴器の阿部さんが助けに来てくれて、何とか目的の苗取りする場所にたどり着くことができました。

私は、肌が弱くすぐに湿疹ができてしまうので素足で田んぼに入ることができませんが、田んぼには昔の人のように裸足で入るものなんだなということが良く分かりました。

午前中は、苗代から苗取りをするので箱に腰かけての作業でしたが、真夏の日差しが田んぼから反射して顔に照りつけてきます。

昼食は、松山さんの作ってくれたお握り、煮物、まんまるやの小沼さんが作ってきた厚焼きの卵焼きや瓜の漬物など、料理の腕前にプラスした里山の深緑を抜けて吹き下ろしてくる風のスパイスが一層の美味しさを引き立て、豊かな気持ちにさせてくれました。満腹になって、このまま太陽の下に昼寝したい気持ちでしたが、これからが田植えの本番です。

田植えをする田んぼには、ちょうどトラック競技場の百メートル走と同じ程の幅に白いロープが張られていて、四列に真っ直ぐ植えていきます。

腰痛の白井先生は、ジエンベを持って向こう側に立って、ドンドンと打ち鳴らし、何コース遅いぞ！と怒鳴っていました。稲を植える手はサ

ツサと動きませんが、足を前に進めるのは大変です。気持ちだけは前に進むのですが、体は動けません。東京から来た女性は、長靴を止めて、素足で田に入り、わーッ、気持ちがいい。泥パックだと言っていました。私は後が怖いので、長靴を履いたまま。

ジエンベのリズムに合わせてように競争の気持ちで田植えを進めていきましたが、田んぼを二往復ぐらいいしたら、腰痛が始め田んぼの中に立っていらなくなったり、バランスを崩して尻もちをつきそうになってしまいました。何とかドスンと尻もちをつかずに堪えましたが、尻が泥だらけになってしまいました。本当の腰痛になってしまつた。舞台が出来なくなるので、その列を植え終わつたところで、終了とさせてもらいました。

田植えが終わつたら「大地の舞」を舞つつもりでいたのですが、止めにして少し早めに帰らせてもらいました。皆には申し訳ないことをしたなと、ちよつと後悔しています。

翌日の事、お尻と腿の裏の筋肉痛、立つたり座つたりすることがスムーズにできません。何とも情けない思いをしてしまいました。代かきも総てを機械に頼らないで百姓をする事つてとても大変なことである事を切実に知ることが出来ました。体が痛くなつたなど色々なことがありましたが、大地と格闘している自分の姿を想像する時、とても幸せな感じにさせられました。

秋の稲刈りを楽しみに、今から体を鍛えておかなければと思っています。私の植えた苗がどんなお米を実らせてくれ、どんなにおいしい味をつくらせてくれるのか、今から胸がときめいています。

## ギター文化館

### 2009 CONCERT SERIES

- |       |      |           |
|-------|------|-----------|
| 6月28日 | 高橋竹童 | 津軽三味線のひびき |
| 7月12日 | 大萩康司 | ギターリサイタル  |
| 7月26日 | 大島直  | ギターリサイタル  |
| 9月6日  | 村治奏一 | ギターリサイタル  |

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で…、大好きな雑木林に一摘みの土を分けていただき、自分の風の声をつるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

TEL0299-55-4411

歴史ガイドに同行して(11・2) 兼平ちえこ

背をかけたこの平成っ子

舟塚山古墳は笑む

ちえこ

4月、5月、6月の常陸風土記の丘は6年生の学習見学で大変賑わいます。

つくば市、筑西市、行方市、鉾田市、阿見町、那珂市等々から、年々、小学生の見学が多くなっているように感じます。声張り上げて、小学生との触れ合いを楽しみながら、歴史を学ぶ一助になればと力が入ります。

「百聞は一見に如かず」と先生方にも喜んで頂いています。最近風土記の丘に加えて、県内最大の大きさを誇る舟塚山古墳への関心も深まって見学コースに加える学校も多くなりました。国指定史跡でありながら自由に古墳上に立つことが出来、約千五百年前に築造されたといわれる古墳上での子供達は想像豊かに、目を輝かせてくれます。こんな中で少し気になります事があります。地元市内の6年生の見学にお会いしたことがあります。地元の小学生の皆さんのお出でもお待ちしています。さて今回の「霞ヶ浦、常陸国風土記を歩く会」の皆さんへのご案内は、皆さんの歩くコースには入っていない指定文化財となっている常陸国分尼寺と鹿の子遺跡を加えさせて頂き、特別編としてご紹介しましょう。

### 常陸国分尼寺跡

昭和27年3月29日国指定特別史跡に指定。所在地、若松三丁目。国分増寺より北西500メー

トルの所に(府中小学校の裏側)に存在する。国分増寺、国分尼寺は天平十三年(741)聖武天皇の勅願により、鎮護国家を祈るため、国ごとに(六十六ヶ所)置かれた寺院である。国分尼寺は、法華滅罪之寺と称し、法華経の功德により、未来成仏を祈願したものである。常陸国分尼寺は、一直線上に中門跡、金堂跡、講堂跡の礎石群が墓壇上にあつて保存され、全国的に見ても極めて貴重な遺跡である。昭和44年より三回にわたつての発掘調査で出土した遺物の中には、瓦類や土器などがあるが、土器の中で「法華」の墨書銘のある土師器(はじき)(昭和53年8月23日市指定文化財)が出土しており、法華滅罪之寺を証明する資料となっている。(常陸風土記の丘・資料館に展示されている)

面積3万平方メートル、4月には桜の花のピンク色に包まれ、現在は史跡公園として親しまれています。

伝説「尼寺のときめき」(羽鳥屋菓子店様しおりより)

それは千年も昔の出来事。満月の夜が近づくと国分寺の比丘尼(びくに)たちはいつもそわそわしておつた。僧都(そうず)様の寝静まつたころ、尼寺の食堂(じきどう)に集まつた若い比丘尼は、廻廊の外でフクロウの鳴くのを待った。ホー、ホーという声がすると、土塀の外から布の丸い包みがポーンと投げこまれた。

若い比丘尼がそれを拾い、中身を小鉢に移してから、布を投げかえす。月明かりに照らされた美しい比丘尼は、小鉢の中の手紙だけをとってそつと胸元にはさんだ。

「ほら、今宵も《ときめき》が届きましたわ」

と彼女は、まわりの比丘尼たちに小鉢の菓子を食べさせた。全員がいくしむようにその菓子を食べる。部屋の中に、うすすらと酒の香がただよつた。虫の鳴き声に交じつて、彼女たちのヒソヒソ話が聞こえてくる。

ふるさと、家族、そして恋の話と、おしゃべりはつきることがない。

月が低くなつたころ、若い比丘尼は手紙を開いた。府中の若者からの手紙には、いつも彼女への恋心がつづられていた。ところがその晩にかぎつて内容は違つていた。

「将門の大軍が攻めてくる。町はすべて焼かれる。十七夜までに、逃げなさい」

はたして、将門は手紙どおりに襲つてきた。僧侶は兵士に命ごいをし、役人は泥の上にひざまづいた。尼寺も、同じように焼かれたが寺の仏像や金銀は、《ごき洗いの池》へ前もつて沈められた。尼寺に残つたものは、おびただしい焼け瓦と礎石だけであつた。数年して、若い男女が草だらけの尼寺ヶ原を訪れ、歌をよんだ。

尼寺ヶ原 石見に来れば 道もなし  
足にまかせて 尋ねこそすれ

満月の夜のあの《尼寺のときめき》を知る者は、もう誰もいない。

伝説「尼寺のときめき」の中の《ごき洗い》について…

(参考資料・ワクワクふるさと紀行「いしおか100物語」)

かつて国分尼寺跡の付近に、「ごき洗い」と呼ばれるややくぼんだ畑地がありました。「ごき」とは昔、木製の食器類をそつ呼んでおり、「御器」と書きます。台所に出没するあのおそましい「ゴキブリ」のゴキは、この御器が語源だそうので、食器などに

集まってくる虫だからゴキブリとよばれるようになったとか。

ごき洗いは、その昔国分尼寺があった時代には池になっていて、食器などを洗った場所でした。今でもごき洗いの地中には、黄金が眠っているのだと伝えられているそうです。

江戸時代のごき洗いを掘るようになった百姓が崩れ落ちた土の下敷きになって死んでしまったといひます。

くわばら、くわばら。見学の皆さんは、どうか黄金を掘りあてようなどとはお考えになりませぬように…。

### 鹿の子遺跡

所在地、鹿の子一丁目。

地下の正倉院といわれた鹿の子遺跡は日本道路公園による常磐自動車道建設に伴う記録保存のため、昭和五十四年十一月から昭和五十七年二月までの間に発掘調査された。その結果、奈良時代の終わりから平安時代初めにかけての特殊な性格を持つ遺跡であることが判明した。特に鉄、銅製品を製作する工房跡が極めて注目し値するものである。農耕用具や武器、武器が出土したことから、当時の社会的背景として蝦夷侵略のための前線基地であると考えられたり、国衙に供給する製品を作るための付属工房であるとも考えられた。

一方、この遺跡の名を世に広めたものは、漆紙文書《平成五年三月二十五日、市指定有形文化財（考古資料）》である。

本遺跡から出土した漆紙文書は半月状の形で赤外線カメラによる判読で初めて当時の行政文書であることが判明した。この文書は漆を貯蔵した容

器の蓋紙として使用されたもので、そのため円形、半月形として残存し、今に伝わった。この文書には当時の戸籍や稲を貸し付けた時の帳簿などが克明に書かれていた。この戸籍などから当時の常陸国には二十二万人から二十四万人の人口があったと推定された。

現在、鹿の子遺跡の主要部分は常磐自動車道となって消え果ててしまいましたが、主要部分となっているあたりに石岡市教育委員会の案内板が建てられてあります。行き方として、石岡駅方面から若松町交差点をガソリンスタンド左にして入っていく、間もなく右側に府中小学校、そして国分尼寺入口を過ぎまして数十メートルで常磐自動車道を下にしての交差点で案内板と出会う事が出来ます。尚、常陸風土記の丘の資料館には、鹿の子遺跡から出土した鉄、銅製品、土器等の遺物、そして、貴重な漆紙文書はレプリカとして展示されています。また発掘された建物の跡である住居ブロック、工房ブロック（鉄品や銅製品を作った作業場）、官衙ブロック（役所的機能を持つ所）等の一部分が復元されています。

どうぞ、常磐自動車道あたり、出土品、復元された家屋等と合わせ、見学し、平安ひとの偉業に思いをはせてみては如何でしょうか。

参考資料・いしかの歴史と文化

石岡市歴史ボランティアの会編

お大事に！ 日々草 笑顔振って

ちえこ

まけないで生きていかなければ 伊東弓子

人は生まれながらにして悪者なのだろうか。生まれた時は無垢でも年月を重ねるにつれて、垢がついていくのだろうか。

仕事の中で、幼ない子供達には、

「人間には、良い心と悪い心があるの。悪い心が大きくならない様に、良い心を大きく育てていくのよ」

と希望を持って自信を持ってやって来た積りだが、疑問に思うこの頃だ。

テレビ、新聞、その他いろいろの情報が流れているが、もつと身近な地域や家庭、グループ活動の中にこそ深刻な事が沢山ある。そういう出来事を起こす大もとは他人ではなく、自分自身の中にこそある事に気がつかなければならぬと思った。毎日毎日いろいろな思いが湧いてくる。どうしよう、どうしようかとあくせく考える。そして行動を起こしている。その時の心もちが行動のもとになっているのだ。

身近に起きたり聞いたりした事から考えていきたい。

二十年前の暮れだった。南天の生垣が自慢だった友の家で、一夜にして根本からなくなってしまう。お正月には赤い実が通る人を和ませてくれる筈だった。商売にしている者の荒稼ぎだろうか。県道沿いの花壇に地域の人達が葉ボタンを植えた。何日もしないうちに根こそぎ無くなっていたという。通りががりの人かな、前から目をつけていたのかなと皆で残念がったという。

これらとは違つ近所の嫌がらせもある。生垣の若葉が始め春の彩りを楽しみにしていたところ

熱湯をかけられて枯れてしまったそうだ。悔しくて悔しくて仕方がなかった老女が恨みごとを言っていた。

家の枝が伸び、隣の屋敷まで枝が張った。近いうちに切らなくてはと思っていた矢先切られてしまった。寸法を計ったかとおもう程きちんと切られていたそうだ。腹がたつよりも「御苦労さま」と自分をおさめたそうだ。そういう私もひめ紫宛がかわいいから咲き終わったら切ろうと思っていたら切られていた。「うーん」と一瞬思ったが、車で角を曲がる人にとっては道路の先が見えないのだ。やっと気がついた。一人よがりだったと反省する。

水をはって田植えの準備をした所にビール瓶の欠片が散らばっていた。何と恐ろしいことか。拾い集めると二十本分位だったそうだ。

選挙時の事、車のタイヤをパンクさせたり、墓を掘り中のものを散ばしたとデマをとばしたりする人がいたという。

地せぶりをされた話はよく耳にするが境杭が動いた、動かした、の争いもある。斜面などでは長い間に土が流れて曲がったり倒れたりすることがある。杭を抜いたんだらうといわれ悲しがつている人に「自然の悪戯でしょうと言ってみては？」役所に行ってみてもらっては」と助言してみたが、恐ろしくてと言っぱかりだった。

道沿いの投げ捨てゴミには腹が立つ。道ばかりではない。あらゆる所の問題だ。私も一時よく拾った事がある。「貴女はえらいね。よく拾ってる。なかなか出来ないことだわ」と言われ、天邪鬼な私はそれっきりやめた。本当は皆でやらなければならぬことだ。私だけいい子になってもだめだ。

そして、人の目のない所だけ拾うことにした。

何でそうされたかわからないという嫌がらせがある。蛇の死骸を庭に放り投げられた。猫の死骸を家の出入口に置いてあった。息子の車の出入りする所に古釘を沢山散らして置いてあった。そんな事、嘘だらうと聞き流していたが、無言の嫌がらせがあるのだと分かった。

家を借りていた時、二階に上がる鉄の階段に猫の糞がまとまって置いてあったことがある。何だろう。野良猫がいるのは知っていた。その度片付けはしたが気持ちがおさまらなかった。しばらくして誰がするのか分かって来た。情けない人たちだと思つと口にも出なかった。いつの間にか止めた。私の勝ち、と一人満足した。

友の親は山林を切り開き開拓し、電気のない生活から今日の生活を作りあげた。ここ十年位の間新しい人達が住み始めた。

「木の葉が散ってくるので何とかして欲しい」「ピアノの音がうるさいわ」

きつい声で電話がかかって来たという。顔は見えない。でも明日の朝は合つかも知れないのに、今じゃ小さくなっているほかないよ、とこぼす。

昔から長い付き合いをしてきた地域でも常に問題が起こり辛いおもいをする人がいる。高い塀がまわり、年輪を育ててきた木も倒され、車の出入りであいさつをかわず事もなくなった。それでも本家という名にこだわったり、新宅、分家と力を振りかざして、仲間はずれにしたりする。ここを自分達の子供に故郷として贈りつづのだから、何とか気持ちよく暮らしていけないものだろうか。もつと素直になれないものかなあとおもつ。

家庭も今の時代、社会をよくあらわしている。

構造自体からも人が変わったように思う。行った来たりする廊下がない。ドアが開まると簡単には開かない。まして鍵でもかけられては拒絶されたおもいになる。「おはよう」「おやすみ」の会話もできない。そう嘆く話は多い。さみしい話を何とか明るい方向へ持っていきたいものだ。

毎日、体の中から湧いてくるおもいはどうしようもないのだ。人にぶつかるとか、解かしてもらおう努力をするか、自分がへそを曲げるかだ。何とかよい方法を編み出すか、自分から廊下を作り扉をあける努力をするかしかない。

先ずは私のプライドを大切に考え、こちらから声をかけていこう。そして、相手の話をよく聞こう。

神様よ！反省しなさい 菅原茂美

天地創造の神話では、創造主が「混沌」に、秩序をもたらし、宇宙が生まれたという。

旧約聖書では、最初に「光と闇」「昼と夜」が分けられ、太陽と月と星の配置により、時間や季節が定められ、それから、さまざまな動植物が、生み出された。そして、泥からアダム(男)が創られ、アダムの肋骨からイブ(女)が創られ、夫婦となる。二人は全人類の起源となり、男女は補充し合うことを義務づけられる。しかし世界の不完全さの原因は人間が、神に不服従であるからだという。

保守的な人々は、今なお、聖書に書いてある、これら創世の物語は、唯一真実であり、近代宇宙論や進化論は、単なる一説にすぎなく、人心を惑わす、

邪悪なものとして排除しようとする。

現にアメリカでは、27の州が公立高校で進化論を教えることを禁止するか又は、「この世のすべては全能の神が創ったとする「創造説」を併せて授業するよう州法で定めている。しかし近代科学を信奉する人々も黙ってはおらず、連邦裁判所に当該州法の廃止を訴え、現在、係争中であるという。

信じられないかもしれないが、世界最高レベルのハーバード大学生で、進化論を信じない者は45%もいるという。進化論を教えた高校教師の30%は父兄などから、脅迫を受けているという。どうしてこんな国から、多くのノーベル賞受賞者が続出するのか、真に不思議である。(パチカンのローマ教皇は、1996年ターウインに対し、迫害したことを認め、137年ぶりに謝罪した。)

さてニュートンは、白光を、プリズムで分光した。そして虹は、7つの波長からなると解析した。これに対しロマン派の詩人たちは『虹の持つ詩情を破壊した』として、ニュートンを激しく非難した。虹は遠く眺めてこそ、ロマンがある。それを7つの色に分析したからといって、なにになる?.....と。

この話と同じように、現在、DNA解析技術の進歩により、何万年も前の化石人骨から、DNAを検出し、進化の系統樹など、おおよそのことが推論できるようになった。古墳時代の人骨を分析すれば、出自や何を食べていたかなどが、かなり分るようになった。一方ある関係者からすれば、むしろ古墳発掘などせずに、謎に包まれた状態の方が、ロマンもあり、身元を暴かれずにすむ。無用な科学で、洗いざらしには、されたくないという意向もある。

【しかし最近の新聞報道で、奈良県桜井市にある、日本最古の前方後円墳「箸墓古墳」の発掘調査が始

まり、出てきた土器についていた炭化物から、その年代は、240年〜260年代のものだと鑑定された(学会未発表)。箸墓古墳は、日本書紀には、三輪山の神「オオモノヌシノカミ」に仕えた巫女「ヤマトトトヒモヒメノミコト」の墓と伝えられるが、魏志倭人伝の卑弥呼に共通点が見られるので、ヒミコの墓とする説も有力であった。倭人伝によれば、ヒミコは、3世紀前半の邪馬台国の独身女王。弟が補佐し、30か国を治める。呪術に通じ1000人の女奴隷を侍る。247年没。調査団は、箸墓古墳建立年代と、倭人伝によるヒミコの没年が、あまりにも一致したことから、これまで謎とされていた邪馬台国の所在地は、近畿地方との確信を得たという。】

さて、人類の起源について遡ると、46億年前に地球は誕生した。地球を構成する元素で、36億年前、海で生命が誕生。単細胞生物時代を26億年間積み重ねて、やっと多細胞生物へと進化した。

たとえば多細胞生物でも、クローン増殖のみでは、遺伝子が同一なため多様性がなく、海底火山噴火など、激変(酸欠・硫化水素発生など)する海の環境変化についていけない。そこで多様性を求めるため、生物の本来の仕様は「メス」なので、遺伝子を混ぜ合わせて、多様性を求めるために、今から7、5億年前「オス」なるものを創り出す。雌雄が繁殖の際、遺伝子を持ちより、再配分して、新しい生命を誕生させる。再配分の際、母方の遺伝子が強く、父方の遺伝子は抑え込まれたり、またその逆もあったり、更には、父母の遺伝子の中に眠っていた、祖父母の遺伝子が、強くシャッキリ出て、隔世遺伝現象が見られたり、諸々の変化が現れ、兄弟姉妹でも、千差万別。環境に適応したもののみが、生き残る。こうして、海で繁栄した生命は、5億年前、我々

人類の直接祖先にあたる、「脊椎動物」を生み出す。以後、脊椎動物の魚類は、オゾン層の充実により、有害紫外線が地上に届きにくくなったため、DNAが破壊されなくなったので、海から淡水の川へと、歩を進める。川の浅瀬で両生類となり、幼生期は、水中だが、成体になると鰓(えら)を肺に変え、鰭(ひれ)を足に変え、今から3、5億年前、先発の植物に次いで、やっと上陸を敢行する。以後、両生類 爬虫類 哺乳類 霊長類 類人猿 猿人 原人 旧人 新人(ホモサピエンス・今から16万年前)として進化を遂げ、現生人類が誕生する。

神話における宇宙創世の物語からすれば、今述べた科学オソリーの、木で漬(はな)をかむような話は、ロマンも夢もない、つまらない話...ということになるかも知れない。しかしニュートンの虹の分解から新しい科学が発展し、DNAの解析から、食糧増産や医学の急速な進歩をみれば、ロマンを求めるだけでは、文明の進歩にも自ずと限界がある。

なぜこんな話を持ち出したかという点、自然科学を基礎とする生業(なりわい)の小生としては、たとえ神話とはいえ、あまりにも現実とかけ離れたストーリーには、いささかウンザリ。付いて行けない。

生物はメス主導で進化してきた。例えばギンブナはオスが極端に少ない。特に関東地方のギンブナは、殆どオスはいない。このような生殖を「雌性生殖」といい、オス無しで子孫を残す。しかし一般には、多様性を持たせるために、オマケみたいに、ずっと後の世になって、オスというものが生まれた。

なのに聖書では、多分、男性主体の歴史展開の中で創成されたものと見え、まず男がこの世に現れ、付属的に女が後から付け加えられる。全く逆だ。

\* \* \* \* \*



最近女性が強くなった…とよく言われるが、元々それが本来の姿。女は進化の原動力だ。寿命も長いし、生命力も男より強い。子を産むのだから当然だ。

【20世紀前半までは、男女の寿命差は、殆どなかったといわれる。それは、男は元々戦争や危険な仕事や若い日の暴力沙汰などで、女性よりトータルで、短命であった。しかし女性も、妊娠・分娩で、命を落とす例が非常に多かった。

20世紀後半になると、抗生物質の発見や医学の進歩により、女性は分娩などで命を落とす例は、非常に少なくなつた。そもそもヒトは、誕生前から男の死亡率は高い。受胎数は女100に対し、男は115といわれる。自然流産や死産により、誕生時点では、女児100に対し男児は104になつてしまふ。しかし以後、幼児期・少年期と、男子の死亡率は、女子より高く、25歳時点では、女性の数が一般的に男性を上回る。

平均余命の性差は、なぜおきるのか？ 年齢層で見ると15〜24歳では、自動車事故・自殺・他殺・無謀な行動などで、男性は女性の3倍近い死亡率と言われる。中年層になると、喫煙・飲酒・心疾患・脳卒中・自殺などで、圧倒的に男性の死亡率は高い。

肝心なのは性ホルモン差である。男性ホルモンの「テストステロン」は、LDL(いわゆる悪玉コレステロール)濃度を増加させ、HDL(善玉コレステロール)濃度を低下させて、心疾患・脳卒中のリスクを増大させる。これに対し、女性ホルモンの「エストロゲン」は、全く逆にLDL量を下げ、HDL量を上昇させる。そしてエストロゲンは、神経や血管を損傷させる「活性酸素」を、酸化作用で抑える働きがある。他に、筋ジストロフィーや血友病は、X染色体が2本ある女性には、非常に少ない。

更に重大な発見がある。体中で、DNAが損傷を受けた場合、それを修復する遺伝子が、X染色体にあることがわかった。X染色体が2本ある女性は、1本に異常が生じても、他方がそれを修復する。

しかし近年は、女性の社会進出が増大し、喫煙・飲酒・職場でのストレスなどが増大し、寿命の性差は、以前より少なくなつてきたという報告もある。【さて、寿命の性差は殆ど野生動物でも見られる。雌のマカクザルは雄より8年間長生きし、雌のマッコウジラは平均して雄より30年間長生きである。

原始時代、男は危険な活動が多く、女性に対する比数は、かなり少なかったに違いない。しかし群れを維持するためには、女は次世代生産の原動力。男の代替えはいくらでも利く。いわば、男は消耗品(子孫を残せなかつた、いわゆる、「一夫多妻」が生じた野生動物には多くみられる)。「一夫多妻」が生じた歴史的背景は、欲望の強い一人の男が、多くの妻を娶つたのではなく、男が少ないため、やむなく多くの女が一人の男を共有したというのが真因かも…。

生物の進化は、メスの好みによりオスが選択され、集団の中に遺伝子が蓄積されていく。オスのクジャクの羽は、生存に邪魔なほどなのに、メスはより美しい、大きな羽のオスに身を任す。ライオンやセイウチ等のハーレムでは、王のみがメスを独占しているのではない。雌の中には、見た目にもみすばらしい感じの付属的な雄をあえて好み、身を許すものもいる。DNA鑑定の結果、ツバメも巢の中の半分以上のヒナは隣の旦那の子供ともいわれる。自分の子だと思ひ、せっせと餌を運ぶ父親の哀れ悲しき物語。夫に巢を守らせ、セッセと浮気に走る妻の逞しさ。これを動物行動学では、「番い外(つがいがい)交尾」という。不埒に見えるが、これが動物の繁栄の原動力。

力。多様性のあくなき追求。ツバメが何千kmもの渡りを行う、あの逞しさの源は、実にこの辺にあつたのかも知れない。

動物だけではない。人類は本来、乱婚型の動物である。ただか1万年足らずの文明が築いた、守られもしない社会規範。明治維新で、辛うじて「一夫一婦制」という法律ができた。人類の未永い繁栄のため、そんなものはさつさと捨てろ…とは言われないが、同じ遺伝子の組み合わせで、代り映えのしない子を沢山産むより、奥さん、原点回帰で、たまには出張でもして、遺伝子の多様性を求められたら、いかがですか？。お子様の長男は草野球の補欠でも、次男はイチロー並の…なんてことになるかも…。

さて、6歳ぐらいまでの幼児は、現実の世界と、ファンタジーの世界とを混同しているものらしい。森に迷いこんで、かわいいクマさんやパンピたちとカクレンボをしたり、小鳥たちとコーラスをしたり、暗くならないうちに家へ帰りな…とフクローのおじさんに言われたり。家に帰ってきて、あたかも現実であつたかのように、母親に報告する。これを絵本の読み過ぎと、簡単に片づけてはいけない。大脳発達途上の我々の祖先たちも、きっと、こんな境地で、神話は創成されたに違いない。

神様が、原始の水をかき回し、引き上げた雲から地球が生まれたり、中国神話のように、「宇宙卵」から人間が生まれたりする。

朝鮮神話では、4000年前、天帝「桓因」の子「桓雄」が、3000名の従者を率い、天上の宮殿から下界へ降りてきた。桓雄は農業を起し、法を制定し、道徳を教授した。彼は洞窟に住むクマに、ヨモギとニンニクのみで2日間忍耐を経験させた後、美しい娘に変身させ、自らは麗しき青年に化け、



夫婦となった。男児「檀君」を設け、檀君は後継者となり古朝鮮の創建者となつて、都を平壤に置いた。

いずこの国の神話も、幼児の夢と、あまり変わりはない。このような物語は、一体だれにより、創成されたものであろうか？ 私が思つには、決して、一人の天才的な語り部により、見事に練り上げられた創作ではなく、何代も代を重ねて、多くの人々により、修飾され語り継がれて、発展していったものと思われ。即ち、そこに住む民族にすっかり根を下しているが故に、後々の世まで大衆に支持され、神話 民話へと醸成されていったものと思われる。

そして、神話・民話は、時により、巫女などによる「神がかり」により、より一層肉付けをされ、民衆に根を下ろしていった。肉体を離れたシャーマンの魂は、霊界の心霊と出会い、人間の過去や未来を知らされる。意識を喪失し、硬直し、痙攣発作を起こしながら、エクスタシー状態で 予言を行つたり、王道を説いたりする。民衆は疑うことなく、これを神のお告げとして受け入れる。このようにして、神話・民話は創り上げられたのであろう。

\* \* \* \* \*

さてこうして、神々が作り上げたとされる世界。そして、この世に生を受けた人類。神様がこの世に生存を許した人類という「種」は、果たして神の意にそつた、正道を歩んでいると、胸を張って言いきれるであろうか？ 神を裏切つてはいないか？

この問いに、真つ先に私がひっかかるのは、人類の「凶暴性」である。肉食動物でもないくせに、弱肉強食の残忍性。強烈な欲望を抑えきれずに、欲しいものを手に入れるためには、手段を選ばない。

私がいつも許せない・カチンと来るのは、列強による「植民地支配」。優位な武器を携え、平穩に暮ら

す先住民を、筆舌に尽くしがたい残忍性で凌辱する。世界史は、勝つた者が、自分に都合のいいように、記録される。しかし、ある年数が経てば、そして戦に負けた者も、物を言えるようになると、歴史の真実が暴かれてくる。西欧列強による侵略の数々。インディアンを糧食を断つために、アメリカバイソンを絶滅寸前まで殺しまくつたヨーロッパ白人の侵略者ども。兵糧攻めなど、絶対に許せない。

更に原住民の言葉を禁止し、居住区を設けて差別女を凌辱し男を奴隷にする。今、世界のリーダーとかなんとか言つたつて、わずか数百年前の自分達の祖先がやってきたことを棚に上げ、世界に説得力などありやしない。今からわずか150年ぐら以前、アメリカの捕鯨船500艘が、日本近海で、クジラを無制限獲り放題。これも絶滅寸前まで追い込みながら、今、日本の調査捕鯨さえ、体当たりで妨害している。漁業のハイテク化がこのまま進めば、2050年には世界の海に魚がいなくなるとも…。

明日のことは知らない。今の今、オレさえよければ、それでよい…。何事じゃ？ これは…。

インカは、322万平方km・1600万人の帝国であつたが、1544年、スペインのわずか180人のピサロの軍隊により、滅ぼされた。火器と騎馬（南北米大陸に馬はいなかつた）により、更に数々の謀略により、王の身内を戦わせ、騙し討ちの連発で、最後の王統は途絶えた。インカは、ジャガイモ・トウモロコシなどの原産地で、食糧は豊富。国内は道路網の発達により、文字がなかつたのに、飛脚のリレーで、1日に400kmも、伝言が伝わるほどに、社会構造は充実していたといふ。だが謀略に負けた。

そして、世にも恐ろしきは、近世になつて、世界の歴史に汚点を残した数々の「大量虐殺」。筆頭は、

ナチス・ドイツによるポーランドのアウシュビッツ強制収容所での大量虐殺。第2次世界大戦でドイツは、ユダヤ人を600万人殺害したといわれるが、そのうちこの刑務所で、250万人をシアン化合物のガス室で、殺害したといわれる。ユダヤ人の他に、ソ連兵の捕虜・共産主義者・宗教家。そして身体障害者は、生体実験の後、ガス室に送られたといふ。人間とは、このようなことまでやりぬく、残酷な動物なのかと、背筋の凍る思いで一杯だ。

さらにアフリカ大陸中東部・ルワンダでの大量虐殺も目を覆いたくなる。ルワンダは人口1018万人。農耕民族のツツ族（85%）と、遊牧民族のツチ族（14%）との、1994年の内乱で、ツツ族がツチ族を50万人も虐殺したといふ。その報復で、ツツ族も数十万人殺害されたといわれる。内乱を逃れて隣国などへ散つた難民は200万人ともいわれ、国連による内戦終結後も、双方報復を恐れ、未だに帰国できないでいるといふ。難民キャンプでは、コレラ・赤痢などで、大量に死者が出ているといふ。一体、同じ国民が、出自・言語・生活様式の違いで、こんなにも激しい争いに発展するものであろうか。かつて植民地化していたフランスやベルギーなどの負の遺産だ。先進国は世界のいたるところで、発展途上の、か弱き民を痛めつけ、苛めている。

その他、カンボジア共産党党首 首相となった、ポルポトは、都市の廃絶を訴え、すべての国民は農業に従事せよとして、反対する者は、1975年頃、100万人も処刑した。この悲劇を生んだ発端は、抗フランス闘争である。

更にベトナムでの戦いは、フランスからの解放戦争から、アメリカとの戦いが終結（1975年）するまで、実に30年を要している。ベトナム戦争は、

ベトナム人200万人死亡、負傷300万人といわれる。これに対しアメリカ軍は死亡6万人、負傷は15万人。米軍の最大の罪は「枯れ葉作戦」といわれた猛毒のダイオキシン散布だ。半世紀近く過ぎてもお、先天性異常・癌・死産など多発している。

そして、日本に対しては、広島・長崎に原爆投下。いくら戦争とはいえ、このような大量破壊兵器を実戦に用いる人間性が許せない。今でも爆心地近くにいた人は、DNAに傷が多く、癌の発生率が高い。

第2次世界大戦は、アメリカにとってイタリヤ・ドイツも敵国だったが、白人の国には、原爆投下はしなかった。日本に投下を決定した当事者の大脳は正に「毒饅頭」だ。許せない。(今のオバマ大統領は、尊敬するリンカーンにイメージが重なるので、それほどバカはやるまい。これから期待したい。)

人類という、実に完成度の低い、欠陥商品を創った神様は、相当に、手抜き工事をしたに違いない。当時、会計検査はなかったのかな？ 人類製造は、もっとまじめに、完璧な玉に磨き上げてはしなかった。そりゃ、確かに人類は、芸術や科学に素晴らしい才能を発揮し、偉大なる文明を築いてきた。源氏物語にハムレット。数々の絵画・彫刻・音楽・演劇。ピラミットに万里の長城。金色堂に金閣寺。そして、かくれんぼをしている「かくや姫」を探しに、月まで出かけるようにさえなった。

それなのに神の申し子は、なにゆえ、かくも強欲で、残忍性極まりない怪物に、急変身したのか？

神様よ！ ここでしみじみ、反省しなさい。サルだって反省している。あまりにも無思慮に人類を創ったのが、禍のもと。諸悪の根源は人口過剰だ。

もし小惑星衝突や火山大噴火などで、一端人口が激減したら、神様は改めてリコールをすべきだ。無

料で脳味噌を交換し、もつと穏やかな品格のある新品種に改修して、再出発だ。そして人口は増やさない。縄文時代と同じ、今の人口の1000分の1。これなら、過剰な生存競争は見られなくなるだろう。生き馬の目ん玉を引っこ抜くような戦国時代さながらの乱世もこれで終わり。軍拡競争も終わり。

次世代を担う新人類は、金持ちや頭の良いものは徹底的に排除する。金持ちは、もつと豊かになるうとして、大衆相手に利を貪る。一方、切れ者は、身の丈以上のことを考え、地球全体を考えずに、些事に目がくらみ、奇策を弄し、社会を混乱に陥れる。経済は文化の僕(しもべ)であるべきだ。あたかも、経済こそすべてに優先すべきとする、低品格の人類。こんなのは、明らかに欠陥商品である。全世界を恐慌に陥れたウォール街のエコノミック・アニマル共は、檻に収監し、100年位、強制冬眠だ！

「のんき・くうたら」は平和のシンボル。食べる分だけ働けばよい。人畜無害の、うすのろこそ理想像。森にジャガーはいらない。ナマケモノが、のんびりにぶら下がり、鼻提灯でいればよい。寝ほけた、昼行燈の姿こそ、人類が動物に見習つべき姿である。万事スローライフに尽きる。環境を汚染することはないし、母なる地球を痛めつけることもない。

原点復帰だ！ リコールだ！ 再出発だ！  
神様よ！ ガンバッテ！

征服の大義 参の章

打田昇三

涙じやないのよ 浮気な雨に  
ちよっぴりこの頬 濡らしただけさ

ここは地の果て アルジェリア

どうせカスバの夜に咲く 酒場の女の薄情け

……

……明日はチュニスかモロッコか

泣いて見送る後ろ影 外人部隊の白い服：

(カスバの女) 「カスバ」= 城壁都市

哀愁を帯びたナツメロの名曲である。うる覚えだが、この歌詞に出てくる北西アフリカ各地はアラビア語で「地の果て」を意味する「マグレブ」と呼ばれている。地中海を挟みフランスの対岸にあるアルジェリア、スペインの向こうにあるモロッコ、エジプトの西にあるリビア、そしてアルジェリアとリビアに挟まれたチュニジアがマグレブの対象になる国々で城壁に囲まれた都市が多い。

チュニジアの首都・チュニスには、かつてアラファト議長が率いるPLO(パレスチナ解放機構)の本部が置かれていた。イスラエルに対する抵抗の元祖だから何となく危険視されていたが、この国はフランス保護領から独立して、海運国家カルタゴの遺跡を中心にローマ帝国の遺跡などが点在する著名な観光地であり、農業国でもある。

チュニジアの沿岸部は、「ローマ帝国の穀倉地帯」と呼ばれたほどの肥沃な土地であるが、チュニスから直線距離で一五〇kmも内陸に入るとアルジェリア砂漠との接点になる。その北西部沿岸にエール・カンタウイという場所がある。緯度が東京とほぼ同じで過ごし易いとは言っても、荒涼とした砂浜であるから日本とは違つ。そこに莫大な投資をして一大リゾートを造り出し国がある。石油大国・金持ちのサウジアラビアで、首都のリヤドからチュニジアを経由してモロッコまでの航空路も設けている。何故そのようなことをしたのか？

イスラム圏では原則的に「酒」を禁じている。

イスラム諸王朝の王様などは酒宴を催していたらしいが、コーラン（聖典）には「（人を）酔わせるものを禁止」と書かれているらしい。国によっては「酔わなければ」と勝手な解釈をして飲酒を黙認していると思われる。サウジアラビアも似たような発想で、他国に投資してリゾート施設を造り観光客になって堂々と酒が飲めるようにした。

チュニジアもイスラム圏ではあるが西欧諸国の影響が大きく、ドイツ、フランス、イタリアなどからの観光客が多い。「酒はダメ！」などと言っているのは外国人観光客が来なくなる。商売のためには宗教的制限も黙認せざるを得ない。飲酒を勧める訳ではないが、宗教というものは本来、人間の為のものであるから、人間の都合の良いように解釈し運用されて然るべきなのであろう。

現在のイスラム国家でもトルコなどは東洋と西洋が交錯する国だから融通は効くが、前章で紹介したダリウス大王のペルシア帝国から続くイランは国名を「イラン・イスラム共和国」と称しているだけあつて戒律が厳しい。しかしイランと名を変えても、この国は世界最古の君主国であつた。昭和四十六年（1971）には建国二千五百年祭を盛大に挙行し世界中を驚嘆させたものである。式典には日本から三笠宮が出席している。パーレビ国王が中央集権政治を行っていた頃である。

日本は昭和十五年（1940）に紀元二千六百年を祝った。計算上では日本のほつが遙かに古い訳だが、歴史が嘘だと分かつたからイランの最古を認めざるを得ない。くだいようだが、嘘の紀元に基づく建国記念の日は直ちに直すべきである。

イランでは近代までは各家庭で自家製ワインを

醸造していた。葡萄は発酵するから「酒」を意図しなくても酒になる。赤い顔で「葡萄を食い過ぎて」と言い訳が出来たのかも知れない。ローマG7で恥をさらしたどこかの国の大臣も「葡萄の食べ過ぎ」にすればよかつたのである。

1979年のイラン革命で国王が逃げ、宗教指導者ホメイニ氏が亡命先から帰国すると「イスラム原理主義」が叫ばれるようになった。「現代世界が西洋文明の影響で墮落している」との認識に立ち「イスラムの原点に立ち返つて政治・社会を正していこう」とする運動である。

ここで言う「イスラムの原点」とは、マホメッド（ムハンマド）がイスラム教を興した頃のことだと思つが、千四百年も昔だからアラブ民族は砂漠の中で駱駝と暮らしていた。全てが原則どおりに適用されると、近代化された現代人の生活は根本から違反することになってしまう。

イランの国民は当惑した。まず酒が飲めなくなつたのが辛い。収穫した葡萄の山を前にして父ちゃんたちが唸っている中に発酵して酒になつた。この方法で皆が密造ワインを飲んで憂さを晴らしていたのだが、このことが警察にバレて大勢が検挙された。なぜ庶民の秘密が漏れたのだろうか？一般市民の中に政府の特命を受けたスパイが入り込み密告を奨励していたからである。

二千五百年前にペルシア（イラン）帝国の王として即位したダリウス大王も、スパイ組織を活用して国力を増大させ、かつ自分の権力を保持したと思われる。「王の目」「王の耳」と呼ばれる巡察官が絶えず領土内を回つて地方行政を監視していたと伝えられている。正当な王位継承者では無かつたダリウスの王権基盤は、イラン人部族社会に

脅かされる不安があつたことを物語っている。

エジプト遠征中に謎の死を遂げたカンピュセス王に男子が居たのかどうか不明だが、忒の章で述べたように、偽物に奪われかけたペルシアの王位を取り返したのはダリウスたち七人の勇者たちであるから、そのうちの誰が新国家のリーダーになつても良い訳である。誰を新しい王にするのか？

僅か八か月の天下でも偽の王は定額給付金こそ出さなかつたが兵役の免除、減税などで国民の機嫌をとつていたから倒す側も慎重でなければならぬ。戦場から駆け戻つたダリウスが最初に接触したのはペルシア上流階層出身のオタネスという人物である。オタネスも偽の王が変だと気づいていたから、いち早くダリウスの仲間になつた。

オタネスは先ず王宮に差し出して自分の娘に眠っている偽王の耳を調べさせた。偽王は以前に罪を犯しキュロス大王に片耳を切られていた。危険な任務をオタネスの娘が果たして、これで偽者が立証された。さらにオタネスは信頼の出来る同志二人を誘い、その中の一人は偽王朝首謀者の神官暗殺に際し、暗がり下同士討ちを心配するダリウスに「一緒に刺せ」と声をかけて成功させた。オタネスがクーデター第一の功労者である。

今後の政局をどうするか、生き残つた六人が協議したときに一人は共和制を唱え、ダリウスは王制（独裁制）を主張し、オタネスが独裁は好ましく無いと言つた。残る三人はダリウスを支持した。六人が天運に賭けて王位を競つことになつたのだ。オタネスは条件付きで競争から下りた。その条件とは「王制になつても法律には従つて望まぬ制約は受けない」というもので、ダリウスは承知しオタネスを除く五人が馬の遠乗りを行った。

明け方に東の山まで馬を走らせ、太陽が昇る前に乗馬が嘶(いなな)いた者が王となる約定で一斉に走り出した。全速力で走らされた馬は息切れで声を出す余裕はない。ところが、ダリウスの馬だけは朝日を望む丘の上で歓声を上げた。決めごとに従ってダリウスがアケメネス王朝ペルシ帝国の王になった。正に太陽に称えられた王である。

調子が良いこの話を、例によってヘロドトスは「ダリウスが仕掛けた…」と言っている。それに依れば、競争に先立ってダリウスは馬を扱う家臣に「…タイミング良く馬が嘶く方法は無いか?」と相談したところ、その家臣は「お任せ下さい」とダリウスの乗馬を美人?の雌馬に引き合わせてから雌馬の匂いだけ嗅がせて引き離れた。

競争の当日、家臣は雌馬の匂いが沁みた布を丘の草むらに隠しておいた。ダリウスの乗馬は引き裂かれた恋に悶々としながら走らされて、半ば自棄走りで丘の上に来てみると雌馬の匂いがするから大声で叫ぶ。こうしてダリウスは王になった。競争相手は裏ワザが使われたことを知らないから自分の馬の「不甲斐無さ」を嘆くばかりである。五人のうちの一人は、ダリウスが即位して間もなく王の権威を無視する行動があつて除かれた。

裏ワザでなつても王は王、ダリウス一世は王家本流の不平分子を二年間かけて取り除き、国内を安定させてから領土拡張に乗り出した。その領域は現在のインド北西部からパキスタンを東とし、西はエジプト、南はヨルダン、北はトルコからカスピ海、アラル海にまで届くライン、そして黒海西岸のトラキア地方に及んでいた。ペルシア帝国は王の直轄領土を除き二十の州(サトラップ)に分けられ、王が親任する州の總督が治めた。

総督は行政責任者であるが軍事的権限が無く、既に述べた「王の目」「王の耳」に、何時でも監視されている状態だったようである。ダリウスは見かけは地方分権ながら徹底した中央集権で統治したのである。偉そうに「総督」と呼ばれても重要な仕事は悲しいかな「税金の徴収」だけだった?

ペルシア帝国の首都はスサに置かれた。ペルシア湾北部にある都市アバダンの少し北で、メソポタミア文明の頃から栄えた古都市である。スサから北東に「序章」で紹介したリュディア王国の都サルデイスまで、数千キロに及ぶ高速道路が舗装整備されていたと言われる。交易を重視したこの道が後にシルクロードの一部となったことは想像に難くない。この道は「王の道」と呼ばれて異国征服の為の軍用道路でもあつた。王の道の整備によつて終点から終点までの通行所要日数は十分の一以下に短縮された。日本のように国土交通省や国会議員に頑迷な道路族が居たり、特定道路財源が有つたという話は聞かない。

王の道以外にもペルシア国内の幹線道路は縦横に張り廻らされていたようで、スサから南東へ延びた幹線は、建国二五〇〇年祭が行われたイラン南東部のペルセポリスに達していた。ペルセポリスは主に祭祀と王の権威を誇示するために建てられた宮殿のようであるが、周辺に大都市があつたと推定されている。さらに創始者キュロス大王が殺されたエクバターナ(ハマダン)にも王宮が置かれていた。敵が多かつた国王は、暗殺を恐れて各王宮を転々としていたとも考えられる。

山麓の台地一万二千五百mに建てられたペルセポリスの壮大な遺跡で最も圧巻なのは、征服された諸民族の代表がペルシア国王に拝謁を許される

「謁見の間」に至る階段である。そこには貢物を捧げた諸民族の様子が浮き彫りにされている。二十の州は第一から第二十までの徴税区に指定され民族別に税額が定められたようで、ヘロドトスは徴税の対象となる六十ぐらいの民族名を挙げている。その中で分かるのはインド人、シリア人、アラビア人、エチオピア人、パレスチナ人、トラキア人とギリシア系民族ぐらいのもので後は、パンヒュリア人、リュキア人、プリギア人など不肖にして私の知らない名前が続いている。トルコからカスピ海南岸にいた民族と考えられるがペルシア帝国の広大な版図を証明している。

国内を整備し、始祖キュロス大王から征服を始めたペルシア帝国の領土を完全に把握したダリウスは、次の段階として西方への侵略を開始した。もし、これが東方へ手を伸ばした場合、当時の中国は「春秋・戦国時代」で秦の始皇帝による天下統一の前であるし、日本は「神武天皇」頼みで、具体的には国家が無い時代であつたから、あつと言つ間にダリウス大王は日本まで来ていたかも知れず「酒が飲めない」で泣く人が大勢いた?

日本にとつては幸いだったことにダリウス大王は西へ西へと進むことしか頭になかつたようで、その準備を整えた。手始めにペルシア帝国の北方国境付近に出没する騎馬民族を討伐する計画を立てたのである。その地はドナウ川の流域、現在のルーマニア、ブルガリア近辺になる。

ここで先代の王カンビュセスが果たせなかつた「キュロス大王の仇討」が実現できることにはなつたのであるが、アケメネス王朝を篡奪したとされるダリウスは仇討など考えたことも無く、単に「北方領土を増やしたい」目的だけで行動したの

であろう。北方ではキュロスの首に恥辱を与えた騎馬民族マツサゲタイは既に居なくなり、その本流に当るスキタイが辺境を支配していた。

ヘロドトスは、スキタイとマツサゲタイとの違いというより「マツサゲタイ部族の特徴」として男子は妻を娶るが、妻は部族男子全体の共有である…

長命な男子は賞味期限内に家畜と一緒に食用にされ、それが幸運とされる…

太陽を唯一の神として崇拜する…

神への犠牲獣に馬を捧げる…

などと記録しているが疑わしい。しかし騎馬民族の詳細な記録はヘロドトスしか残していないから嘘っぽくても信用するしかない…

近年はウクライナ高原やクリミア半島などでスキタイの遺跡が発掘され部族連合、王制、軍団組織などの実態が解明されるようになった。遊牧騎馬民族も、かつてのアリア人と同じようにアンドロポ文化圏(吉の章参照)から南下してくる傾向にあり、特にスキタイはドナウ川流域に没を始めたので当然、ペルシア帝国に睨まれる。

即位後八年経った紀元前五一四年、北方遠征を決意してスサの王宮を出たダリウスは大軍を率いて王の道ハイウエイを進みトルコを横断してから現在のチャナツカレ付近に着いた。兵力は船舶要員を除き七十万という数字もあるが五〇%誇張として割引いてもかなりの数になる。

黒海からマルマラ海を経てエーゲ海に出るにはイスタンブール市を東西に分けるボスボラス海峡を越えなければならない。狭い部分で幅は七百メートル程だが、深さが岸壁から直ぐに五十メートル以上もある。今から二五〇〇年前に、ダリウス

大王はその場所に小舟を繋いだ仮橋を架けさせて大軍を渡した。渡海作戦が上手く運んだダリウスは気を良くして、工事の責任者であったギリシア人に莫大な恩賞を与えた。

海峡の向こう側になる狭い半島を含めて、現在はイスタンブール市の新市街地、つまりヨーロッパ側になっている西側一帯は当時の小王国領土を除き、ブルガリア、ギリシアに続く地域で「トラキア」と呼ばれていた。古代の文明国ギリシア人が言う野蛮人の住む未開地である。

ペルシア軍がそこで最初に遭遇した敵は「靈魂の不滅を信じる部族」であった。自分たちは死ぬことが無く神様の許迄行つて生き返つてくると思っているから始末が悪い。

その部族は五年に一度、籤引きで神への使者を決める。当選者は願い事を託されて神の許へ行くのだが、その方法は何人かに手足をつかんで空中に放り上げられる。その先には三本の槍が構えられているから、上手くいけば全身を刺し貫かれて神様に逢うことが出来る。運が悪い者は、槍に刺さらないから「悪人」とされて罰を受ける。

死を恐れない部族が相手なのでペルシア軍も戸惑ったが、敵の人数が少なかつたから勝つ事が出来た。変則的に勇猛なこの部族は全員が死ぬ前にダリウスが騙してペルシア軍に加えた。

しかしダリウス大王にとって順調にいったのは架橋から此処までであった。都市や城砦を持たない騎馬民族は神出鬼没、攻めて来ては退き、その範囲が広大でペルシアの大軍は追い付けない上にスキタイが移動する際に水源を埋められ、草原に火を放たれ、河川の渡河を阻害され、軍団を分断されて補給が続かず討伐どころでは無い。

ペルシア軍が討とうとしたスキタイは黒海西岸部から北岸低地にかけて縄張りを持っていたようであるが、スキタイの仲間である他の遊牧騎馬民族は現在のブルガリア、ルーマニア、ウクライナ、そしてロシアのボルガ川流域からカザフ共和国辺りまで数千キロに及ぶ地域に割拠していたから、全部族がペルシアの行動を警戒している。

ヘロドトスは「禿げ頭族」とか「一つ目族」とか怪しげな部族を挙げているが、それは冗談としてもスキタイの呼びかけで各部族が共同戦線を張ることになっていたから、ペルシア軍の駐留が長引けば騎馬民族全部が敵になるのである。

勝つ見込みが無くなつたダリウス大王が、水戸黄門のセリフだけを真似して「…もういいでしょう…」と言ったときにはペルシア軍七十万の一〇%が消えて、何の戦果も得られなかつた。スキタイの戦士は敵兵の首を斬つて王様に見せ、それから頭皮を剥がしてハンカチを作つたらしいので七万枚の人間ハンカチが出来た…器用な者は縫い合わせて上着まで作つたらしい。

ペルシア軍が全滅を免れたのは「スキタイの馬が隊列に突入して来なかつた」お蔭である。ペルシア軍はなぜか驢馬を沢山に連れていた。その鳴き声をスキタイ馬が嫌つたのである。もしも驢馬が居なかつたならば七万枚では済まなかつた…

スキタイ討伐に失敗した(本人は失敗だと思わなかつたらしいが)ダリウスは、渋々軍をまとめてトラキアまで撤退してきた。トラキアでは死を恐れない部族が服従したので死を恐れる部族は黙って従うしかない。ペルシア軍はついでに隣のマケドニア王国に進駐した。

吉の章で触れたようにギリシア神話の英雄ヘラ

クレスから六代目ぐらいになる（伝説を信用すれば）アミュンタス一世の時代である。マケドニアはトラキアより少し進歩してはいたが王国が出来たばかりで国力は無い。ペルシア帝国に服従を誓ったから、ダリウスは信頼する武将メガバゾスに八万の兵を付けて現地に残留させ、自分はペルシアへ帰還した。この「メガバゾス」はダリウスが王になった際の候補者仲間、つまり偽王征伐に立ち上がった七人の勇士の一人だと思われる。

遠征の前にダリウスは有力武將たちと会食したのだが、その席でデザートに柘榴（ざくろ）を食べた。前にも述べたがザクロはイランのザクロス山地が原産である。中国へ伝わる際に、当時は「石国」と表記されたタシケント経由で入ってきたため「石榴、柘榴」になったと言われる。

赤い実がびっしり詰まった柘榴を見て、ダリウスの弟が「…兄上が柘榴の種の数ほど欲しいと思われれるものは何ですか？」と聞いた。一同は当然「領土」とか「従う国々」という答えを予想していたが、ダリウスは前に座ったメガバゾスを指して「メガバゾス（のような武將）が柘榴の種の数ほどいてくれたら良いと思う」と答えた。これによりメガバゾスは面目を施した。残念ながらメガバゾスは一人しか居らず、ダリウスは希望に燃えて出かけた西方を彼に託したのである。

本国に帰ったダリウスは、約二十年後に再び西方に遠征するのだが、その前に気分を変えて東に目を向け後に仏教の聖地となるガンダーラやインドを侵略したとされる。しかし、その詳細は伝えられていない。やがてガンダーラは逆にアレキサンダーの征服を受けることになる。

「ダリウスがスキタイ征伐に失敗した」という

ニュースは忽ち世界中（と言って中東に限られるが）に伝わり、ペルシアに支配されていたエジプトなどで小規模な反乱が起こったようである。そして序章の末尾で述べたように小アジア（トルコ）沿岸部やエーゲ海諸島に居たギリシア人植民都市で大規模な反乱が起こり、ダリウスはギリシア本土へ大軍を差し向けることになる。

征服欲も有ると思うが、スキタイ征伐で痛目にも遭ったダリウスが、なぜ資源も耕地も少ない未知の地域ギリシア本土を自ら攻めたのであるのか？…確かに植民都市の反乱を陰で扇動していたのは都市国家のアテネではあったが、その征伐くらはトラキアに駐留させているメガバゾスの軍勢に任せれば良かった筈である。事実、メガバゾスは、とかく反乱が起きそうな野蠻国で人口が世界一多いトラキアを何とか抑えていた。

これもヘロドトスの記録に基づき複数のギリシア史にも書かれている話であるが（どこかで似たような話を聞いたような気もするが…）一人のギリシア人医師が、ダリウスのギリシア遠征に深く関わっている。名は「デモケテス」と言つ。ギリシア植民都市での反乱が起こり始めた頃にはサモス島の支配者ポリュクラテスに仕えていた。

サモス島は現在のギリシア、トルコ両国の地図に載っているから、どちらの領土か分からない。金持ち王国リュディアの首都だったサルデイスからだと直線で南西一五〇kmぐらいの、トルコに一番接近したエーゲ海にある。リュディア王国の時代にはギリシア植民都市の有力な地位にあったがキュロス大王がリュディアを征服してからはサモス島の立場も微妙になっていった。ペルシア帝国に服従しても、島の自治は従来どおりポリュクラテ

スに任されていたからである。

キュロス大王から占領地サルデイス（第一納税区）の総督に任じられていたのはオロイテスと言う人物である。この男が些細なことから第三納税区の総督と喧嘩をした。その時に第三区の総督が「…自分の任地の眼と鼻の先にあるサモス島をペルシア領に組み入れることも出来ないくせに！」とオロイテスを馬鹿にする発言をした。

この言葉に歪んだ形で奮起したオロイテスは、悪口を言った第三区総督では無くサモス島を支配するポリュクラテスを憎んで「振り込め詐欺」と「資産運用詐欺」を合わせたような騙しでサルデイスに呼寄せ、これを暗殺してサモス島を奪ったのである。この時に島民は奴隷にされた。

悪口を言った総督も後から殺されたようだが、ダリウス大王の時代になって諜報機関によりオロイテスの悪行は糾弾され、悪い総督は国王の命令を受けた自分の親衛隊に丁寧な刺されて死んだ。しかしサモス島の奴隷たちは、そのままペルシア帝国の所有物にされただけで解放されず、オロイテスが保有していた財産がダリウス大王の許に遷された際に奴隷もペルシアへ移されていた。

部下の不始末を穏やか？な手段で解決したダリウスは、気を良くしてライオン狩りに出かけた。しかし未だ獲物にも会わないうちに馬から下りる際に足首を挫いてしまった。関節から骨が外れるほどの怪我である。当時、世界中で医療の最先端と言われていたのはエジプトである。ダリウスは常に数人のエジプト人医師を側近に加えていた。

エジプトの医師団は、相手が大王なのでミイラ作りと勘違いして怪我をした足を無理に搦じったため気絶するほどの激痛が走っただけで症状が悪



化し、ダリウスは七日七夜を眠れずに過ごした。八日目にサルデイス勤務をしたことのある家臣がサモス島にデモケデスと言つた名医が居たことを思い出してダリウスに報告した。

ダリウスは、直ぐに呼び寄せるように命令したのだが、何処に居るのか分からない。やつとサモスから連れて来られた奴隷の中に居たそれらしき人物がボコをまとい、足の鎖を引き摺った姿でダリウスの前に連れてこられた。ダリウスは「そのほうは医術の心得があるか？」と訊ねたからこれは「治療をさせられる」前提だと分かる。今まで自分を鎖に繋いで虐待していた人物に、医者か？と聞かれ「そうです」とは素直に答えられない。デモケデスは「医術など知りません」と答えた。

それを察したダリウスは、拷問用の鞭と棒を取り寄せさせたのだが、家来は一緒に鉛を持ってこなかった。逃れられないと思つたデモケデスは、医者者の友人がいたから少し医療の知識があるだけ」と言つたのでダリウスは「エジプトの痛い治療より増し」だと思ひデモケデスに治療を任せることにした。王様を拷問にかけたと同じエジプトの医師たちは、捻挫より痛い串刺しの刑を言い渡されたが、治療に成功したデモケデスが嘆願してくれたお蔭で命だけは助かった。

デモケデスは催眠術を使つた安静療法でダリウスの足を完治させた。喜んでダリウスは奴隷の時にデモケデスがしていた足の枷(かせ)と同じ製品を黄金で二組作つて与えた。勿論、外した状態である。現金に換えれば莫大な金額になる。デモケデスは「王様の怪我を直した私が二倍の罰を受けるのですか？」と皮肉つた質問をした。

これを聞いたダリウスは上機嫌で宦官(かんが

ん 去勢された家臣)にデモケデスを宮殿内の後宮へ案内させ「この人が国王の命を救つた恩人である」と触れさせた。後宮の女性たちは手に手に金貨を持つて集まりデモケデスに与えた。

デモケデスは奴隷の立場から一転して広い屋敷を与えられ、世界帝国ダリウス大王の侍医として権勢を誇るようになったのだが本心から望むことはギリシア殖民地世界へ戻ることである。しかしそれを言い出せばエジプト医師団と同じ扱いを受けかねないから演歌「望郷酒場」でも歌つて気を紛らわすしかなかった。そのようなデモケデスに絶好のチャンスが到来したのである。

ダリウス大王の正妃はアトツサと言ひ、創始者キュロス大王の娘であつた。先に述べたようにアケメネス王朝ペルシア帝国の正当な継承者では無いダリウスが、王権を主張するためにはアトツサの存在が不可欠である。そのアトツサが他人に見せられない場所の病氣になつた。

余計なことだが、アトツサはエジプト遠征中に謎の死を遂げた兄・カンピュセス二世の正妃でもあつた。古代王朝では王権存続のために近親婚が行われていたのである。なお、ダリウスとアトツサとの間に生まれたクセルクセス一世は長男では無かつたが、ダリウスが王になつた以後に生まれ、たことから王位継承権を主張して即位した。

アトツサが患つたのは乳房の腫瘍であつたらしく治療も出来ずに放つて置いたために患部が広がつてしまつた。「これは！」と思つたアトツサは意を決してデモケデスと呼びよせ、腫瘍の診察をさせた。化膿が進んでいたが毒を出せば治まる病であるからデモケデスは「何とか努力してみます」と言つてから「その為には条件として自分の頼み

を聞いて欲しい」と真剣な顔で申し出た。

女性の大事な部分を見せてから「頼み」と言われたので、アトツサは一瞬、びつくりしたのだが、デモケデスの願ひことはスケールの大きなものでアトツサは少し馬鹿にされた気分になつた。

サモス島で奴隷にされたデモケデスの生まれ故郷は実はイタリアのギリシア殖民主都市クロトンである。やはり医者であつた父親に反発しサモスへ来て名医になつたので、本心に帰りたい場所はクロトンのだがギリシア圏なら何処でも良いと思つていた。デモケデスが王妃に出した治療の条件とは「ダリウス大王にギリシア遠征を勧めて貰ふこと」であつた。実現すればギリシアへ行ける。

クロトンはイオニア海に面したドーリア系殖民主都市で現在でもクロトネという小都市がある。イタリアを長靴に例えれば靴底の南イタリアで「土踏まずの先端」に当る部分である。

乳房に傷痕一つ残さず腫瘍を直して貰つた王妃アトツサは、デモケデスとの約束どおりダリウスにギリシア遠征を勧めた。デモケデスは自分の野心を覚られないように「一度で良いから王様のお供で故郷に錦を飾りたい」ぐらいのことを王妃治療の条件に言い出していたかも知れない。

アトツサのほうは生まれながらの王女だつたが馬の恋愛のお蔭で王になつた夫のダリウスは「成り上がり者」で本人がその影を消したがっていることを察している。自分には隠していてもスキタイ征伐ではトラキアとマケドニアを服従させたが本命のスキタイには逃げられた事実がある。デモケデスの頼みが無くても、アトツサは夫の株を上げたいと思つている。遠征はペルシア国民に大王の威光を示す絶好のチャンス」とけしかけた。



王妃から寢室でせがまれたダリウスは上機嫌で「妃よ。そなたが申したことは、予もかねてから考えていたことである…」と西方遠征を諦めていなかったことを王妃に告げたのだが、少し見当違いで前に征伐し損ねたスキタイをもう一度退治すると言い出した。王妃アトツサは慌てて「手数のかかるスキタイは大王の暇な時期にゆっくり征伐することにして、今はどうかギリシアを攻めて下さい…」と頼んだ。その理由として「…勇猛だと評判のスパルタの女をせひ侍女にしてみたい…出来れば他のギリシア女たちも集めて召し使ってみたい…」からだと言った。

そして「未知のギリシアの案内をする者として貴方の怪我を直したデモケデスがいるではありませんか？」と胸の腫物を治療させた際の約束をさり気なく果たしたのである。その夜のうちに遠征を決めたダリウス大王は、夜明けを待って直ぐに実行に取り掛かった。

家臣の中で選りすぐりの人物十五人が、朝飯も済まないうちに王宮へ呼び出され、大王から直々の命令が伝えられた。それは…

医師デモケデスを案内人としてギリシア沿岸を回り、遠征を前提とした偵察を行うこと

デモケデスが里こころを起して逃亡しないように注意し、必ず連れ帰ること…であったが、未知の地域へ行くのに何も手掛かりが無く、案内をする人物を監視するというのは何となく不合理な話でどうして良いか分からない。狐の案内で森の向こうへ油揚げを運ぶような気持ちである。

一方、ダリウス大王はデモケデスと呼んで「十五人の者にギリシア旅行をさせるから案内をしてくれ」と頼み、「そなたも十五人と一緒にペルシア

へ戻ってくるように…」と言った。そして現在、デモケデスが持っている家財道具一切は土産に持ってゆくように、戻って来た時に何倍もの家財を整えてやる…と約束した。その上でダリウスは、自分からの土産として、どこかの北国の船号のように貨物船一艘にあらゆる品物を満載して贈るとも言ってくれた。デモケデスは貨物船の分だけを買つことで家財道具は置いていった。

諺にある「呉越同舟」とも違う不思議な関係の十六人は取り敢えずシドンの港へ向かった。レバノン南部沿岸にある現在はサイダと言う都市で首都のベイルートから七十kmほど離れている。レバノンは海洋民族フェニキアの本拠地で、ダリウスが早々と征服していた。シドン港には二艘の新型客船と一艘の貨物船が停泊していて、貨物船のほうはダリウス大王からデモケデスの親族に贈られる土産物の専用船である。

地中海を進んでギリシア圏に入った御一行は沿岸部を回って地形地理などを調べ、詳細な報告書をペルシアに送った。それからデモケデスは調査団の十五人をイタリア南部のギリシア植民地へと案内し、先ずタラスに上陸させた。懐かしい故郷クロトンからはイオニア海沿岸部二百kmほど手前である。現在は人口二十数万の南イタリア随一と言われる都市であり、イタリア半島へのギリシア植民地進出はタラスから始まったのである。

デモケデスはタラスを治める王様の許へ挨拶に赴きペルシア人を紹介した。侵略の前に偵察に来た」とは言わなかったが、王様がデモケデスの苦勞話を聞き、事情を察して船の舵を取り外させ十五人を監禁してしまった。親切なタラス王のお蔭でデモケデスは故郷へ錦を飾ることが出来た。

デモケデスが土産を配っている頃、やっと監禁を解かれた十五人のペルシア人は海路を急いでクロトンへやって来た。中央広場でデモスケスを見つ、捕らえようとして町の人々に叩き出された。ペルシア帝国の威光もイタリア半島のギリシア植民地では通用せず、案内人にも逃げられた十五人は調査どころでは無く、見知らぬ海に漂流しタラス近くで奴隷にされ、後に救われたという。

デモケデスは、逃げ帰る一行にダリウス大王への伝言として「自分が、クロトンでは著名な人物であること（…単なる奴隷ではなかったこと）を知って欲しい」と述べた。ダリウスは怒り、かつ落胆したのだが、ギリシア遠征に失敗したからデモケデスは無事に故郷で病院を開いたと思う。

名医のデモケデスには逃げられたが、ダリウス大王は十五人の偵察隊が齎したギリシアの情報を分析し、大軍を派遣して部分的に攻め込めば容易に全土を征服出来ると判断した。その頃、実に都合良くダリウスを頼って来たギリシア人がいた。その名をヒッピアスといい、都市国家アテネの前僭主（せんしゅ）である。

英語で「tyrant」と言うのは「暴君」らしいけれども、その元のギリシア語「tyrannos」が僭主と訳されている。貴族制社会の古代ギリシアで非合法的に（例えば武力を用いて）一人支配者になった者が僭主であり必ずしも暴君とは限らず中には善政を敷いた者もいる。日本で乱世の英雄と呼ばれる武將は僭主のようなものである。登場の過程に無理があるから失脚も早い。ヒッピアスも市民の信用を失ってアテネを追放され、どういつ縁故を頼ったのかペルシアへ流れきてダリウス大王に取り入った。ダリウスにし

てみれば鴨がネギと鍋まで背負って訪ねて来たようなもので早速、ギリシア遠征の案内役にした。

ヒッピアスは自分の故国を裏切ったのであるが当時のギリシアは昔の章で述べたように幾つかのギリシア系民族がエーゲ海、イオニア海、地中海の島々や沿岸部、それにギリシア本土の都市などに割拠して小国家（都市国家）を築き出店として植民都市を支配していた。最盛期にはその数が百か所を越えていたと言っから、とても「ギリシア国民」とか「ギリシア人」などという感覚は無い。

ダリウス大王には申し分のないギリシア遠征の準備が整った。ところが、いざ出発という段になつて海の向こうでギリシア本土に接するトラキアとマケドニアに駐屯していたメガバソスから只ならぬ緊急報告が届いたのである。紀元前五百年から同四九八年頃のことと推定される。

それが序章の終り近くに概略を記載した「サルデイス市の反乱」に始まり「ミレトス市の抵抗」に至る一連の暴動である。このためにダリウスは先ず鎮圧部隊を小アジア（トルコ西部）に派遣し、自らのギリシア遠征を数年間も待たされることになる。この騒動を惹き起こした植民都市ミレトスの僭主はアリスタゴラスと言った。

非合法的な手段で僭主の地位を得た人物なので政治的手腕も人望も無く、いち早くペルシア帝国に尻尾を振ってミレトス市政を任せながら大きな失敗を仕出し、それを隠すためにサルデイス市などで反乱を扇動したのである。この男が期待していたのはギリシア本土の都市国家、特に精強を誇ったスパルタの軍勢であった。当時は「陸のスパルタ、海のアテネ」と言われていた。

スパルタ王も奥地のマケドニア、トラキアが既

にペルシアの支配下にあり、海峡の向こうにあるトルコまでペルシア帝国に占領されたことに危機感を持つていたから、アリスタゴラスの反ペルシア運動に賛同したのだが、ペルシアのことを良く知らない。そこで「攻めてゆく場合にサルデイス辺りからペルシアの都まで幾日ぐらいかかる？」と質問をしたらしい。

聞かれたアリスタゴラスは完成した「王の道」のことを忘れて、つい「…三か月ほど…」と答えてしまった。スパルタ王は、余りの広大さに呆れてミレトス市への援軍（ペルシアとの戦い）を断つたという。一方、アテネ市のほうでは主力の海軍を派遣したのだが、戦闘に依る火災で役に立たない。スパルタ陸軍の不参加で、結果的に反乱軍はペルシア軍に制圧されてしまつたのである。

この結果、ダリウス大王は王妃アトッサのおねだりに関係無く、ギリシア征伐を遂行する決意を固め、自らは後方で指揮を執り、若い將軍のマルドニオスに、おそらく百万以上の大軍を率いさせてギリシアへ向かわせた。將軍マルドニオスは、ダリウスが偽の王を退治した際の同志ゴブリアスと王妃アトッサの妹との間に生まれた。つまりダリウスの甥であり信頼の出来る人物である。

この遠征に先立ち、反乱を鎮めたダリウス大王はその地の諸都市代表を集め、ペルシア帝国の覇権を意識させる一方で「僭主制の見直し」など反乱防止の対策を立てている。しかしペルシア軍遠征の強行は、ギリシアのみならずペルシア帝国自体にも大きな損失を与えることになる。

## 補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけはいけません。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示しておりますので、お気軽に、お立ち寄りください。（石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可）

石岡市石岡2158 6  
電話0299-24-3881

《特別寄稿》

私の入院日記

ギター文化館代表 木下明男

今年の四月、毎年の事で無駄だと思いつつも定期健診を受けた。何時ものように、淡々と決められた項目を受診。そして、いつものように、胃におかしい所があると言われ、またかと思いながらも、医師から「暫くカメラを撮っていなければ、この際やつといた方がよいよ」と言われ、胃カメラをやることにした。

担当医が、毎月受診している医師と一緒に、結果を定期診断日に合わせたのでゴールデンウィーク明けとなった。

その時の担当医との会話

「変わりないね、数値も変わりないね」

「はい」

「胃も…、待てよ、2ヶ所摘まんだな。良性だろう。いや、待つて…これは悪いな…。主治医の先生から話を聞いた方がいいな」

看護師に「直ぐ 先生に連絡して」と指示する。そして、先生から、摘まん片方から悪性の腫瘍が見つかった。除去手術が必要なので病院を紹介しよう、と言われる。

病院は、設備の整っている友部の癌センター、土浦の協同病院、近くでは山王台病院があると言われ、1週間後までにどうするか決めるよう言われる。ネットで各病院を調べ入院までの検査等が自分で通える近い所を…という事で山王台病院に決めた。

1週間後、主治医にその旨を伝えると、その場で山王台病院の院長に電話し、これもまたその日のうちに診療を受けることになった。そして、手

術日などがあつという間に決まったのである。入院の予定日がちょうど秋川雅史のコンサートであったので、翌日の入院にしよう。

手術にあたり再検査が行われるのであるが、この際、体のメンテナンスをする意味で諸々の検査を行ってもらうことにした。

一昔前だと、癌を患者に直接告げる事はなかった。しかし今は、ごく当たり前に告知する。そう、今は告知とは言わない。普通の検査説明と同じである。癌の発生部位、大きさ、どのように摘出・切除するか、切除は胃の2/3とか3/4とか全摘だとかを説明する。

何でも無い普通の手術の感である。事実、今の医療レベルでは、ごく初期の癌手術などはそうなのである。しかし、私の年代ではどうしても不治の病として余命を考えてしまう。実際身近に、父母や叔父叔母、祖父祖母と癌で亡くしている。

数年前、兄が胃を取ったと聞かされた。また友人が肺癌・大腸癌の手術をしたと聞いている。しかし、自分がその立場になるとは思いもしなかった。

大袈裟にせず一人密かに済ましてしまおうと思っていたのであつたが、入院をするにあたっての保証人は同居家族以外の人でない駄目、などの問題が生じ、身近な友人・仲間にも頼みにくく、子供や兄弟に頼まざるを得なくなる。そうなると思ふ本意ながら段々と大袈裟になってしまふ。

種々の検査が終わる5月23日土曜日、午後3時過ぎに入院。煩わしさを防ぐのに個室を希望したが、その日は空きがなく4人部屋に入る。

大腸の検査でポリープを4つ(うち一つはワイヤーでギロチン)摘んだので食事は5分粥。しか

し、糖尿治療のインシュリンはそのまま継続であったので、寝る前に低血糖を起こしてしまった。何もすることがなく、事前に買求めておいた本(池波正太郎の時代小説)を読みながら佐藤先生5枚目のCDのテープを聞く。ここ何年も味合う事もなかった優雅な至福の時であった

翌24日曜日。朝からTVを見たりCDで音楽を聴いたり、落語を聴いたり、そして読書。ギター文化館の事を何も考えずに過ごすのは、こちらに来て初めての事である。夕方訪れる嫁さんから1日の情報を聞くが、居なければ居ないなりに何とか動いて行くものらしい。手術は、全麻酔なので心肺の訓練用器具を渡される。食事はまだ5分粥なので、お腹が減ること減ること。嫁さんと体重が減るね、と大笑い。

25日曜日。手術は27日水曜日で、明日家族を呼んで説明を行うとの事である。今日も1日やる事が無く、読書とCDの鑑賞三昧。今まで聞くチャンスの無かった佐藤光正の布川事件を歌った「壁のうた」を鑑賞。感激！中沢桂の「日本の名歌」を鑑賞。心が洗われる。モーツァルトは良いね。落語も楽しい。池上正太郎の上下巻は読了。山本謙一の直木賞受賞作「利休にたずねよ」にとりかかる。偶然だろうが、両方とも命に関わる、どう生きる…が題材の本だ。

26日火曜日。相変わらずやることなく暇で、読書三昧。読書に飽きるとCDで落語を聞く。入院初日に低血糖を起こした関係で、毎日、食事前に血糖値を測ることになった。インシュリンも打たず、糖の吸収を抑える薬も飲まないのに通常より血糖値が低い。どうも普段の食事が問題のようだ。そうかと言って、病院食では仕事はできない

し、食べるという楽しみが無くなり、生きる喜びが半減して甚だ面白くない。昼食前に突然造影X線検査を行う事になり、血管の確保を行った。午後から、家族と共に手術の説明が行われ、その後剃毛し、やっと風呂に入れるという。土曜日以来なので3日ぶりだ。明日の手術の不安と、風呂の楽しみが半々だ。午後から手術の説明。病名は胃癌。再発転移が起きぬよう、患部と共に血管・リンパを取り除くため2/3を切除する。併せてリスクの説明。予期せぬ出血 再手術・輸血、感染症、縫合不全、腸閉塞、エコノミー症候群、等々7項目と、5年何もなければ完治との説明であった。手術開始は14時から4時間ぐらいい。説明終了後、外出をして家に風呂へ入りに帰った。執刀医は院長とのこと。説明者は笹屋医師。

まさに組板の鯉状態。これは人事ではない、事実なのだ。不思議と切迫感がない。自らを追い込みたくない自己防衛なのかもしれない。

山本謙一の「利休にたずねよ」を読了。看護婦が明日の手術に備えてと、眠れるように鎮静剤を持ってきた。

27日水曜日。手術当日、やはり緊張している。6時前の検温時に、7時過ぎに洗腸をするからと告げられる。血糖値は125、朝食は出るのか？組板の鯉は料理されるのを静かに待つ心境か？

私は千利休（昨夜読了した小説）にはなれない。だんだん不安は高まってきている。そのせいか血圧は普段より高い。下が96もあった。7時過ぎ洗腸を行ったが少々の便しか出なかった。8時少し前、本を読んで過ごしているが、何故か緊張が高まる（不安と言った方があたってはいるかも）、それでも世の中は何も変わっていない。

ギター文化館は嫁さんが手術立会のため留守番が居ないので、午後より臨時休館にする。何時もと違った落ち着きの無さであるが、朝ドラの「つばさ」は欠かさずに見た。9時少し前、手術着に着替える。一歩一歩執行に向かって進んでいる。嫁さんは立ち合いに来るだろうが、はたして息子は来るのだろうか。前にTVで鳥越俊太郎さんが手術に向かうところを撮影していたが今はそんな心境か？ その昔、やはり逸見正孝というアナウンサーが癌の告知を公表し治療したが、自分で病室のベッドのシーンと手術着の着替えを撮影していた。つい最近も歌手の忌野清志郎が亡くなったばかり。

さすがに朝食は抜きだった。不安はあってもお腹は猛烈に空くものだ。9時過ぎ手術のための点滴。10時30分病室を個室に移動。個室ではあるがかなり狭い。血糖値は152。段々手術時間が迫ってくる。点滴は2本目。個室内と外の景色の写真撮影。12時、2本目の点滴が終わりそうである。少し前に、手術室の看護師さん（妊娠8カ月）が手術の説明に来る。その後、若干血糖値が高かったため、4単位のインシュリンを打つ。

腹減った。藤沢周平の「風の果て」上下を読みはじめる。NHKのTVでやった事があるみたいで、記憶のある筋立てのようだ。3本目の点滴に入る。これが終わると手術室行ききようである。

息子が手術に立ち会ってくれるようだ。今、自宅から電話があった。やがて息子も到着。成田から直行だという。仕事で北京にいたそうなので、この知らせがなければスエーデンに飛び予定だったそうだ。相変わらず格闘技の選手たちの手配をやっているらしい。

嫁さんと息子に挨拶をして手術室へ。事前に教えられたように手術台へ自ら上がり膝を抱え込んで横になる。脊髄へ痛み止め注入の確保をするようだ。覚えているのはここまで。麻酔を打たれたのも含めて何も覚えていない。

気がつくともベッドの上。嫁さんと息子が顔を出す。顔には胃に通じる管が挿入されている。背中には痛み止めのための細い管。チンチンにはオシッコを抜く管がつながっている。多分鎮静剤が何かを点滴に入れたのであろう、その夜は、苦もなく睡眠したようだった。

Coffee & Tea Room  
**《ふらの》**  
ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦  
蕎麦会席料理のお店です  
(ギター文化館通り)  
看板娘(犬)「うらら」ちゃんが  
皆さんをお迎えいたします。  
営業時間 11:30~15:00  
16:00~18:00  
月・木曜日が定休日です。  
電話 0299 43 6888

お知らせ  
7月18〜20日行方市井上の西蓮寺・山百宮の里で  
野口喜広さんのオカリナコンサートが行われます。  
ぜひお出かけください。

編集事務局 〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)

URL: <http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

ギター文化館発：ことば座第15回定期公演  
夏休み特集「ふるさと童話」

8月16日(日曜日)開演午後2時

「ふるさと」とは、たくさんの暮らしの物語が生まれ、降る里のことを言います。

暮らしの物語の芽は、日々の光や風の景(かげ)の間にたくさんかくれてあります。

「雑草だって目守(まも)れば花のきれい」 私達の暮らしの足元をちょっと目を凝らして見ると感動の物語の芽がたくさんあることがわかります。 ことば座第15回公演は、親子で楽しめるふるさと童話を朗読と手話演技にお楽しみいただきます。

公演の最後に、小さなふるさと物語「一行文(一行詩)」を手話の舞表現に、皆で楽しみましょう。

脚本：演出 白井啓治 美術(背景画)兼平ちえこ(装美)小林 一男  
出演：朗読・しらみひろぢ 手話演技朗読・小林幸枝

入場料3,000円 (前売券2,500円：小学生1,000円)

前売券は、ギター文化館 0299-46-2457 いしおか補聴器 0299-24-3881 で取り扱っております。

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35  
0299-24-2063 fax0299-23-0150

ことば座「風の塾」生徒募集中!!

ことば座では、暮らしの中で新しい自分を発見し、表現するための後押しをする教室

「風の塾」を開いています。(各教室は月2回の授業。受講料月額3,000円)

絵と一行文教室 (講師：兼平ちえこ 白井啓治)  
詩を手話で舞う「朗読舞教室」(講師：小林幸枝 白井啓治)  
エッセイ教室 (講師：白井啓治)  
朗読教室 (講師：白井啓治)

入塾および教室の詳細は、下記「ことば座事務局」(担当：白井)  
電話 0299-24-2063 までお問い合わせください。